

「ソークラテースとダイヤモンドの合図エピソード」 をめぐるって

——最終講義のために——

水* 崎 博 明

—

「私はダイヤモンドの合図を聞く人間なのだ」とアテーナイ市民に言っていたソークラテースはそこをしかし怪しくも思われ告訴状に認め^{した}られて遂には刑死することともなったのですが、そのような大事にさえ到ってしまうようなことをソークラテースは何故躊躇うことなく我が身一人に親しくあることとして、人々にも語っていたのでしょうか。今日はこの話題について私の考えましたところを皆さんにお話することで、本学での最終講義にしようかと思っ

います。

先ずは何よりソークラテースのそのエピソードの語り方そのものに触れることが、何と言っても必要でしょうか。それはそのすべてを示せば次のようなものです。

一、『エウテュプローン』三A～B

エウテュプローン　そう願いたいのですが、ソークラテース、だが私は危惧しますね、その逆が生ずるのではないかとです。何故って、何のことはない、私には思われるのですからね　“ヘステイアー（竈の女神）から始めて” 国家に仇をなしている、あなたに不正を加えようとしていながらにも、と。それにまたどうか私に語って下さいよ、何をまたすることでああなたは若者たちを墮落させているのだと彼は主張するのですか？

ソークラテース　それがね、奇妙なことなのだ、驚くべき人よ、とにかくそのまま聞くところではねえ、彼は言うのだからね、私は “神々の創作者” なのだ。で、新奇なものとして神々を創作して行つては古来からの神々はこれを奉ずることをしないのだから、彼はまさしくこうしたこと公事の訴訟に及んだのだと。これが彼の言うところさ。

エウテュプローン　分かりました、ソークラテース、あなたが仰有つておられることなのですよ、ダイモンからものがあなた御自身にその時々を生ずるのだと。さればあなたが新しい鉞脈をめぐって切り出した者のように見て、彼はかくてその訴状を書き立てるに及んでしまっているわけなのです……。

ソークラテース クレイニアースの息子よ、僕は思うが、君はきっと驚いているだろうな、僕は君を恋する最初の男となった上で、他の恋する連中がもう沙汰済みとなっているのにな、ただ一人離れて行きはしないということ。それに、一方、他の連中は五月蠅いくらい君と言葉を交わしていたのに、他方、この僕と来たらこれ程の年月の間、話しかけることさえもしなかったということだね。

このことには、だがその所為となったものは人間並みのもではなくて、否、何かダイモーンの反対なのだよ、その力を実に君は後にもきくと聞くことだろうがね。だがしかし、この今は最早反対をしないので、その通り、僕は君のところへ遣って来たのだ。僕は樂觀しているのだ、この後もそれが反対することはあるまいと。

三、『ソークラテースの弁明』三二C～三二E

多分、されば思われることでしょう、奇妙なことだと。この私は、私的には、一方、それらのことどもを忠告する、歩き回り余計な御節介をしながらに。公的には、他方、敢えて大衆の中へと進み出て行きあなた方のことをポリスに對して忠告することをしないとは、と。だがしかし、そのことには他ならぬあなた方がこの私がしばしば到るところで語っているところから直接お聞きされていることが原因なのです。私には何か神的でダイモーン的なものが生じて来るのだですね。実にこれを訴状において茶化しながらメレートスは書き立てたのでした。この私には、然るに、それはあるものなのです、子供の頃から始まって一種の声として生じて来ながらに。そしてそれはそれが生ずる場合

には、常に私に対して逸らすのです、何をであれ私がまさしく遣って行こうとしているそのものを。然るに、決して押し進めることはしないのです。そのものがまさにあるのです、私に対してポリスに関わることもを行為することに反対するものとして。そしてとにかく実に見事にと私には思われるのです、それは反対しているところ。何故なら、あなた方はよく御承知ありますから、アテナイ人の皆さん、もしこの私が以前からポリスに関わることもを遣って行くことに手を出していたらとつきの昔に私は身を滅ぼしましたあなた方をも何一つとして裨益することはなかったことでしょうし、また私自身をもそうだったことでしょうから。

四、『ソークラテースの弁明』三九E〜四〇C

何故なら、この私にとって、裁判官の皆さん——何故なら、あなた方こそは裁判官と呼んで私はまっすぐに呼んでいることでしょうか——或る不思議なことが起ったのでした。何故なら、私にとっては慣れ親しまれているお告げ、ダイモーンのなものそれは、先の時間においては時のすべてにおいて全くしげと常にありましたしそして全く些細なことどもにおいても反対しながらありました。もしも私が何かをまっすぐな仕方ではなくて遣って行くこととするならばです。然るに、この今に、私にはかく起っているわけです。まさしくそれをこそあなた方が御覧に御自身でなられておられることどもが。そして実にそれらは、とにかくそれを人が思いそして見做すものであるわけです、諸々の悪の最たるものであると。然るにこの私に対して私が朝早くに家から出て行く時にも反対しなかったのです、神の合図は。また私がここ裁判所へと登場しようとしていた時にもそうでしたし、そして言論においてもまた何処に

おいても私が何かを言おうとしているのに対してです。それにしてもそれはその他の言論の中では実に至るところで私をその語って行く間にも差し押さえたのであります。然るに、今、何処においてもこの成り行きをめぐっては、行動においても言論においても、反対はしなくてあるのです、私に対しては。されば、何がその原因をなすものだと私は理解するのでしょうか。この私があなた方にお話しを致しましょう、何故なら、恐らくは私の身に起ったこととそれとは善きこととして生じておるのだからです……。

五、『テアゲース』一一八D～一三一A 省略

六、『エウテュデーモス』二七二D～二七三A

ソークラテース いいや、早速にも君は聞くさ。僕はともかくも言えたものじゃないんだ、注意を彼らに向けてはいなかったとはね。否、全く注意をしていたしまた覚えてもいるのだ、それで君には僕は遣ってみるだろうよ、最初からすべてを詳らかにすることを。何故なら、どなたか或る神のお計らいで、僕はたまたま座っていたのだ、其処、君が僕を見たところ、脱衣場に一人だね。そして、もう心では立ち上がろうかと思っていたのだ。だがしかし、立ち上がろうと僕がしたところ、生じたのだよ、いつものしるしのダイモンめいたそれが。されば、僕はもう一度腰を下ろしたのだ、そして僅かばかり後に入って来たのだ、その二人が——エウテュデーモスにディオニュソドローロスだけれども——そしてその他の弟子たち、とこの僕には思しき者たちが同時にあらためて大勢……。

(生まれや育ちの善い品性も国内においては様々な悪しき影響を受けて本当に哲学の道へ誘われる可能性を喪失するが、国外に追放されたなら自然的素質のままに哲学に留まり得る。小国に生まれた偉大な魂が国事遂行を自らの価値以下だと見なすなら、或いはその素質から人々が哲学以外の技術を軽く見てそれには向わず哲学に向かうなら哲学に留まるだろうと見て、さてソークラテース自らの場合はどうかと言って)

しかしながら、我々のものは語るには当たらないのだ、ダイモーンの合図のことだけでも。何故なら、或いは何処かしら先の人々の中の他の誰かにとって生じたことがあったか或いは誰一人にとっても生じたことはなかったというものなのだから。

八、『パイドロス』二四二B～D

ソークラテース 私がまさしく、善き人よ、川を渡って行こうとしていた時に、ダイモーンのものでかつまた何時ものこととしてそれが私に生ずることになっているしが生じて来たのだった——だがしかし、それは私に対して何であれ私にまさきに遣って行こうとしていることを抑えたのだけれど——そして、或る声をそこから聞いたかと私は思われたのだ。そしてその声が私には許さなかったのだ、立ち去ることを。私が浄めをする以前にはね。実にそれはあたかも私が何か神的なものへと過ちをしてしまっているのであればというように。さあそこで、されば先ず、私は古い師なのだ。だが、全く卓越したという者ではない。しかしながら、ちょうど諸々の文字が下手だといった人々の

ように、先ずこの私自身のためにである限りでは十分なのだよ。されば、今やはっきりと私は理解するのだよ、その過ちを。実に何とだよ、君、我が友よ、とにかく何か占いの力を持ったものとして魂もまたあることか。何故なら、この私を不安にさせたのだから、先ずは或ることがまた以前にも、その語りを私が語っているそのところではね。そして私は何だか赤面をしたのさ、イビュコス言葉そのままに。何か神々の許では

罪を犯せしに、我は誉れを人々の面前にては購おうとしてはいけないのかとだね。だが、この今はもう感知したことだ。その過ちを。

九、『テアイテートス』一五〇B以下

(ソークラテースは、若い魂が産むべきものを持っている時にその魂の出産の看取りをするのだとする彼の産婆術とはその若い魂たちの交わりを当然のことながら配慮するものなのだということをつつ、若い者たちが彼自らに對する交わりを求めた場合の対応は、彼に對するダイモン合図の次第なのだとして)

・・・この人たちが、もう一度彼らがこの私との交わりを求め驚く程のあれこれを遣りながらに遣って来るその場合、或る者たちに対しては、一方、私にとって生じて来るダイモンのなものがともにあることを妨げ或る者たちに対しては、他方、それを許すのだ。そしてもう一度この者たちは進歩をするのだ。

以上、煩を厭わずプラトーンがソークラテースに言及させている箇所すべてを引いてみましたが、このダイヤモンドの合図エピソードはそれがソークラテースその人の告訴において訴因ともなっているところからも人々には自ずから関心を引くところなっていて、それがどういう性格のものであったかということは従来より人々によって広く注意をされて来ました。その一応の誰しもが容易に指摘をするダイヤモンドの合図エピソードの性格把握においては、それが如何にも明示的にソークラテースによって語られているところから当然至極にもその合図の「禁止性」ということが全うにも注意されて来ました。このことについては恐らく誰一人それに異論を差し出すことなど、敢えてしないことでしょう。言うまでもなくこの私自身にもその点については何の疑念をも持ちません。

しかしながら、ソークラテースは何故にそのようにダイヤモンドの合図が彼自身の行為を禁止したということを執拗に謎めかして語ることをしたのかその点の謎については、大方の注意或いは注釈は殆ど黙して語らずといったことに終ってしまっているように浅学な私にとっては見受けられます。そこでこの私としては、私としてその謎をこう解くことが出来はしないかという点に集中して「ダイヤモンドの合図エピソード」の問題を今日はお話ししたいと思えます。

さてしかし、何処から始めたならその謎へ接近することが適うのでしょうか。私としては余りにも明示的な「禁止」というダイヤモンドの合図の持つ性格もそのエピソードとしては他にも色々の事柄を語るものであることを考え、その

「禁止」という核心が何故それらのエピソードとともにあり得るのかという風に考えて見たいと思います。何故なら、この「ダイモーンの合図エピソード」に与えられる殆どの注釈も解釈も殆ど注釈もしなければ解釈もせぬ理解として、先ず私にとっては如何にも示唆的に受け取られて来るのですが、私には「禁止性」ということの他にも、ダイモーンの合図の禁止はそこからすべからく新たに對話が始まったのだ、それは對話の原因なのだと言うことが注意されます。特に『エウテュデーモス』篇ではソーラテースが立ち去ろうかと立ち上がりかけたのを差し止められてもう一度腰を下ろしたところから二人のソフィスト兄弟との「徳」をめぐった對話が始まるのだし『パイドロス』篇でも恋をする人間の狂気と自失の弊を説く弁論家リュシアースの弁論をパイドロスその人に聞き終え、聞き終えたからにはその場を立ち去ろうとしていたところを「待て立ち去るな」と抑えられ、その結果は逆に恋の神エロースを蔑する不敬の論を取り消すパリンノーディア（取り消しの歌）へと取りかかりエロースに関する壮大なミュートスを語る言論へと向かうことが見られます。『ソークラテースの弁明』においても当時の男子としては成り行きそのままなら当然にも進んだであろう政治生活をダイモーンの合図によって禁止されたこと、そしてそこからの帰結としての人間的な生活を吟味する宿命としての人生、對話と問答の生がつまりは語られることになっています。そしてこのことが自己一身の人生の決定或いはその人生の幸福の回顧することへとまた広がって行くことを私たちは知るのであります。これを要するに、私としては「ダイモーンの合図の禁止性」というのもそれはソークラテースについてまさに本質的に語られないくてはならぬエピソードに向かうべきものであるという、まさにそこでこそ見なくてはならないのではないかと理解

されるのではないかということです。

三

それならば如何にしてその「ダイモーンの合図の禁止」はそのエピソードへと向かうのか。私にはその問いを解くべき鍵はまさにその「禁止」を語る語り方そのものの中にこそ秘められているように何やら思われます。何故なら、ソークラテースのエピソードと言ってもそれはつまりその彼の「仕合わせ」はどうであったか、「よく仕合わせたのか」ギリシア語で言えば *eu práteu* していたのかどうか、ダイモーンの合図の禁止後にということなのでしようが、その「仕合わせる」「よく行為をする」というまさしくその言葉に関してこそ、他でもないその「禁止」ということも語られているからです。ここはどうしてもギリシア語原文の表現に頼りながらその英語訳を合わせ示しながら、私のこの点に関して着想する所を明らかにすることをお許し願いたいと思います——

・・・そしてそれはそれが生ずる場合には、常に私に対して逸らすのです、何をであれ私がま^まさに遣^らって行^くうと、しているそのものを。然るに、決して推し進めることはしないのです。

・・・, ἢ ὅταν γένηται, ἀεὶ ἀποτρέπει με τοῦτο ὃ αὐτὸ μέλω πράττειν, προτρέπει δὲ οὐποτε.

・・・from time to time it forbids me to do something which I am going to do, but never commands anything.

〔ソークラテースの弁明』三一D、英訳はB・ジョウエット〕

私がまなしく、善き人よ、川を渡って行くうとしていた時に、ダイモーンのものでそしてまた何時ものこととしてそれが私に生ずることとなっているしが生じて来たのだった——だがしかし、それは私に対して何でもあれ私がまさに遣って行くうとして、いることを抑えたのだけれど——そして、或る声をそこから聞いたかと私は思われたのだ。

• • • *Ἡκί ἐμεῖλον, ὠγαθέ, τὸν ποταμὸν διαβαίνει, τὸ δαυμόνιον τε καὶ τὸ εὐθὺς σημείον μοι γίνεσθαι ἐγένετο—αἰὶ δέ με ἐπίσχει ὃ ἂν μέλιω πρᾶττει—καὶ τῶα φωνὴν ἑοῶσα ἀντόθεν ἀκούσαι, . . .*

I mean to say that I was about to cross the stream the usual sign was given to me,—that sign which always forbids, but never bids, me to do anything which I am going to do; and I thought that I heard a voice saying . . .

〔『パイドロス』二四二BC、英訳はB・ジョウエット〕

右に拠って見ればソークラテースは「ダイモーンの合図の禁止」を受けての後の彼の仕合わせ或いは行為についてエピソードを語られるのだけれどもそのことがまさに「行為をしようとしていたその時に干渉して来た禁止からする」そのことであることを私たちは知らされるといふのではないでしようか。英訳の表現を見ます which I am going to do だとか I was about to cross だとか言われていて、do (なす) とか cross (渡る) とかとうとうようなその行為

「ソークラテースとダイモーンの合図エピソード」をめぐって (水崎)

もそれに対しての be going to とか be about to とかといった或るたゆたいとでも言ったらよいのでしょうか、そのような何か或る独特な瞬間にソークラテースもまた晒されていたことを私たちは見なくてはならないようです。行為しようとしている時とは、一体、どのような時なのでしょうか。少なくとも行為をしようとしているのであれば未だ行為はこれをしてはいないことまでは明らかでしょうが、それがどんな時だということでソークラテースはダイモーンに干渉されるのでしょうか。私たちは先ず「行為をしている」ということから考え始めてみましょう。

四

「行為している」ということを彼のホメーロスの叙事詩は次のようにも描写をしています。

しかし、さあそこで二倍の程海を過ぎりつつ、我々が離れて行った時、

その時にもまたこの儂はキュクロプス奴に話しをしかけた。だがしかし、回りでは仲間たちが

有めの言葉の数々で声を上げた、口々に各人が。(『オデュッセイアー』九卷、四九一〜四九三行)

さはあれ、して見ると、ヘーレー女神が誓いを立てかつまた誓約の式をし終えたからには

両神はレームノスとイムブロスの町を後にし、

靄を身に纏い、軽々と行程を過ぎ、行って行った。『イーリアス』十四卷、二八〇～二八二行)

これに抛ればホメーロスの叙事詩の主人公たちは叙事詩の筋書きのままに空間に軌跡を引き、空間を過ぎり、つづまきに文字通り行為を果して行くようです。すなわち「何処何処に行く」のだというまさにその行為の観点を筋書き通りにただひたすら実現して行く、その意味においてです、またここでは先ず「行為しようとしている」というようなたゆたいは何もなく、それ故にその行為に干渉をされる隙も何一つない。それは一応号砲一発走り出した百メートル走者と走路との一体とも如何にも近似するとも言えましよう。だがしかし、ここでは想像を逞しくすればスタートの姿勢をとった走者にとっては或いは「走るのは止せ」という何らかの干渉のある余地は絶無とは言えないでしょう。

蓋然的にはほぼ零に近い可能性ですが叙事詩の主人公たちが筋書きに沿って絶対に行為するように干渉を排除してはいないのではないのでしょうか。すなわち、これを逆に言って、百メートルの走者が断固走者となり干渉を排するのは百メートルのゴールに走り込むことを自らの目的として自己の内にその目的を内在化し得たならということではないかということです。要するに「行為とは目的が内在化したものの謂いである」ということです。従って、ホメーロスの叙事詩に登場する神々や英雄は、一方、叙事詩のまさにその筋書きのままに目的を自らの内に内在化させて行為をするが、他方、競技者たちは競技を遣り抜く強い意志の選択によって行為をしようとするのであり、その時の彼らに対する外からの干渉をスタートラインに立つに及んでは事実上ゼロにしてしまふのだと言えるでしょうか。けれども、

「ソークラテースとダイモーンの合図エピソード」をめぐって(水崎)

一六八三

競技者にとっての「行為をしようとしている」ということにはむしろ巾があつて、なるほどスタートラインに立つてそれはその極限でしようがしかしスタートラインに立つまでのその「行為をしようとしている」は大いに悩ましいものでむしろまたあるのだと言われることでしょう。それ故、「目的の内在化」ということにはその強度という問題があるのだと見られるでしょうか。オリンピックの勝者が次のオリンピックをどうするかは我々に不断の話題です。

五

そして、今、そもそも「何故に人は行為をしようとしているのか」という問題もまた何か根本的にあるようです。そして私たちはその答えを「目的は確かに内在化しもある、しかしそれは本来内在化し切れないものなのだ」というところに求めることが出来るように思います。確かに或る一つの目的は果たされます。しかしながら、それは何時も何かその目的に収まり切れない余剰の目的とともにでしかない。早い話し、この間の事情をプラトーンの主著の一つ『国家』篇の冒頭でのソークラテースの姿で見えますと、彼はアテーナイの港町のペライエウスへとベンディス祭りという祭りとその行列の見物へと出掛けて行きますが、さあ祭り見物も終えたからアテーナイの町の方へ今しも戻ろうとしていたところをペライエウスの若者たちの一行に目撃されてその敬愛の心を押し売りする一青年の家へ言わば拉致されてしまい、そこで遣つて来た青年の年老いた父親と久し振りの再会の中から富裕なその老人にとっての富裕の有益をソークラテースが質問し老人が「借りたものをちゃんと返し正しく生きることが得られることだ」と

答えてそこから正義と国家とを論ずる一大大著が生まれるということになっています。ここでは「ダイモーンの禁止」ということは持ち出されてはいませんが、今しもアテーナイの町へと戻ろうとしているソークラテースがそこを引き留められ予定変更にならざるを得なかったというところでは、「ダイモーンの合図エピソード」で彼が言うそれと全く構造が一緒だと言えましょう。祭りの見物という所期の目的は果たされた。けれどもソークラテースはアテーナイへ戻るという所期の目的には収まり切れないその目的を抱いてでしかそれを持つことを得なかった。その目的が外からの干渉に干渉されるあるたゆたいを持ったものであり「行為そのもの」の如く目的が内在化した揺るぎないものではない。すなわち、ソークラテースの港町ペライエウスへの下向という目的内在化のある行為はアテーナイへの還向という目的の内在化しきってはいない何か「成り行き」とでも言うべき或る行為の時間を、ソークラテースに経験させたもののように思われます。

そして、今、その本質は成り行きなのではないかとも見られるこの或る行為は本格的な行為の持つべき目的の内在ということ固い意志に基づいて得てはいなくともそれがあたかも確かな行為でもあるかのように行為として許容をされ加えて放任されるように思われるのではないのでしょうか。例えば、我々は映画を見に行きます、音楽会へも行きます。またこの今のように講義に出席なさったり致します。しかしながら、それらが終わった時にその場所を去ることどのような固い意志やその選択が求められていることを我々は意識することでしょうか。殆どそれはまさしく文字通りに成り行きとしてむしろ唯々諾々と我々が遣ってよいことだと思っただけのことでしょう。そして、今、広く

思つて見ると我々の日常とはほぼこの何の固い選択も決心も意志も不要な成り行きの海で満たされているのであり、成り行きのままでは行けないのだと禁止されるのは、例えば結婚問題等がそうであるという如く一生の内でも或いは我々にとっては幾度かに過ぎないことだとも見られることでしょう。すなわち、人生は行為をし行為をし終えてその行為には余剰であつた行為をしようとしていることの連続のあり方ですべてが尽されており、そして「行為をしようとしている」ということでまさに私たちが人生が生きられていると言つてもよいのではないかということです。何故なら、例え固い意志が働き目的が確固として内在化することを得なくとも「行為しようとしているのだ」というその「成り行き」のその中には何かしら目的が、事実上、下りて来ているとも思われるからです。何故なら、例えそれが「成り行き」に過ぎないのだとしても、私たちはそれでも実際上では行為をしているようですから。

六

我々にとってこうした問題のその核心は何なのでしょう。恐らくは「行為」ということが問題ともなつて来たのですしそして行為が行為であるのは「目的」が内在化してこそということでしたから、およそ「目的」とはどういうものの謂いであるのかということこそが、問われるべきことともなるでしょうか。こうした時この私にとってはその「目的」ということに関しては「それは探すものである」ということもまたそれに絡まっていますから、その「探求する」という観点でそれがどう見られるものであるかということが、何かしら自ずと問われて参ります。

時にこうした引っかけかりでプラトーンの哲学を見てみますと、数々の作品中で「徳とはそもそも何であるのか」を問うた彼の『メノーン』篇での思索が、当然のことながら思い出されて参ります。何故なら『メノーン』篇において対話人物メノーンその人は「徳」を知っている積りで「徳とは云々」と次々に答えたすべてのその回答を覆されて、その知っている積りを剥奪されて万事休したその挙句に、周知の探求のパラドックスを表明しますから。メノーンは万事休した思いの彼に対してもなおソークラテースが「徳」の探求へと誘うのに対してこう反問致します――

それでどんな仕方であなたはお探しになられるのですか。ソークラテース、あなたが全くのところそれが何であるのか、これを知ってはおられないようなものを。何故なら、あなたが知ってはおられないことどもの中からどのようなものを前に立てながら、あなたはお探しになられることでしょうか。或いは、もしかた精々あなたがそのものに出逢われたとしても、どのようにしてあなたはお知りになられることでしょうか、それこそがあなたの知らずにおられたそのものだ。 (80d5-8)

さて、メノーンその人の右の表明における一方での意図はまさしく「探求のパラドックス」であり探求が構造的に不成立であるというそのことの表明に当てられてはいますが、このことはしかし逆にむしろおよそ「探求する」とはその構造的な保証がなくてはならないのだということをも表明をしていることが私たちにとって注意されて来るのではないのでしょうか。メノーンの「どのようなものを前に立てながら」という言葉に私たちが注意するならメノーンは「徳」が探求の対象で飽くまでもあろうともするならともかくにもそれ先ずは「探しもの」でなくてはならぬ。

そこで私はその「探しもの」を知っている積りでその特徴をこれこれしかじかだと述べて来たのにまるっきりそれらを否定されたからには自分は確かに知ったのだというその思いから今も知っているのだと思つてその思惑から答えて来たのも、何の効き目も持たなかった。それはあたかも探しものがあるのだというその確信もそもそもお前には探しものなどなかったのだとされているかのようだ。まさにそうであれば彼にとつては、そもそも「探しもの」が確かにあるのだということはどういふことなのか何か根本的に問われる状況になつてしまふようです。

だがその問いも私たちにとり殆ど自明なことを答えて先ずは回答となることでしよう、曰く「私はその持物を喪失した、だから探すのだ」と。それかあらぬかソークラテースはメノーンその人の今し方に見た「探求のパラドックス」といふ「想起の説」といふのに対しては、実は或る神職にある人々に聞いたとする「学ぶとは想起することなのだ」といふ「想起の説」でもつて対処しておりまして、それに拠ればその「探求のパラドックス」も次のようにパラフレイズされます——

分かったよ、どのようなことを君が言いたいのかはね、メノーン。君は見ているかな、そいつを何と論争的な議論として君が引き込んだことかと。これは、して見ると、あり得ないのか、探求することは人間にとつては、知っているものも知つてはいないものも。何故なら、まあとにかく知っているものならばこれを探すことはないだろう——何故なら、知っているのだから。そして何一つにかくそのようなものにとつては探求の必要はないのだから——知らないようなものもまたそうだろう——何故なら、彼は知らないのだから、何を彼が探すべきか

ということを。(80e1-5)

思うに、ソークラテースはメノンその人の「探求のパラドックス」を語りながらも要求する他でもない探求の構造そのものをこそという要求に対して、これをおよそ我々の行為の stage of action (行為のステージ) を分析的に示すことでもって対応をして行くようにも思われますが、この分析の中ではそのようにしてソークラテースが

イ、探求を完了し知るに到って最早探求することが不要なもの

ロ、その探求もその探求以前であって未だ探しものとしては立てられてはいないもの

の二つが探求の過程とともに「行為」の三つの舞台を作っていることが見られることでしょう。そしてこの時に最も肝要なことがソークラテースの一見するところ何気ない何かしらぼんやりとした言い方の中に秘められていることを私たちは気づかなくてはならぬように思われます。それはメノンその人もすでに「あなたが知ってはおられないことどもの中からどのようなものを前に立てながら」といった表現で指摘していたものでソークラテース自らは「何故なら、彼は知らないのだから、何を彼が探すべきかということ」と言ったそのことです。何故なら、今、私たちがこれを落ち着いて考えて見るならばその「探すべきもの」とは「我々が失ったと気がついたもの」であることにまさに我々は気がつくだろうと思うからです。つまりまさしく「喪失感覚」が、メノンの場合で言えば「徳」を知っているというすべての思惑が剥奪されてしまっただけに「探求のアポリアー」を言い出さざるを得なかったその「剥奪」の感覚こそがポイントなのということですが。何故なら、「喪失」という単なる事実だけではその真実は未だ真実とはならず、それは「私は失った!」というその気づき感覚と意識とによってこそ、初めて喪失の真実となる

「ソークラテースとダイモーンの合図エピソード」をめぐって (水崎)

一六八九

だろからです。すなわち、右の「あなたの知ってはいないものの中から」というその「知らないもの」とはまさにそのもののその喪失を知らずまたそれに気づかないものことでしょう。何故なら、気づいていたならそれは立派に「探しもの」となるはずですから。かくて「探しもの」の存在とは喪失の意識にこそ基づくことともなりましょう。

七

思うに、私たちはこのようにしてソークラテースにとっての「ダイヤモンドの禁止の合図」というものの持つ意味の殆どその近くに迫ったのではないのでしょうか。何故なら、彼は行為をまさしく今しようとしていた、すなわち、目的を内在化させようとしていた。つまり、「探しもの」を探そうとしていた。そしてこの「探しものを探そうとすることが出来るのだ」ということは「自分はその今探そうとしているそのものを失ったと気がついた」というそのことでした。そしてもし気がつかないならば、ソークラテースは行為をしようとしていたその「成り行き」のままのその行為をそのままにするのでした。こう見られるとすれば、問題は我々の人生にとって十中八九不断のことでありかつ本質的に許容されてある「成り行き」、すなわち、「探しもの」のない或いはそれに気がつかない行為と探すべきものの或る自分に気がついてこそ始まる行為とのその対比の中で考えられることになることでしょう。財布を本当は忘れていたのに気がつかず悠々とその成り行きまかせにしているのと気がついてどうしようかとその対処を考えるのと優劣を考えるとというような問題でしたら恐らくは気がつかずにいる間抜けさ加減を人は笑うでしょうが、しかし人

はその人生の一大事というような大事な問題にまでなるとむしろそれが何であるかを等閑にしそんな問題のあることなどはむしろ飽くまで気がつかないでいて、出来れば成り行きのままに行為し生きて行くことを、事実上よしとしてしまふものではないでしょうか。

メノンという人はソークラテースの「徳とはそもそも何であるのか」という問いに対して知っている積りで最初のうちは悠々と答えていた。成程それは一面では如何にも尤もなことだとされるべきでしょう。何故なら、全く「徳」というその言葉に対して無知であったならば答えて行くべき当てがない。逆に見て、彼が答えを与え続けたその限りでは「ああ、それについて答えればよいのだな」というその当てにしている、それを「それを自分は知っているのだ」との感触として何かしら特権的に胸内に秘めていたのでしょう。それ故、彼はその特権のそのままこの今にもずっと知り続けているのだとしてその思惑のまま問いに答え続けたが実は今はその「徳」を語るべき文脈を忘れてしまっていることに初めて想い到ったのだということでしょうか。同様にソークラテースを刑死させたアテナイの市民たちの多くもソークラテースの如く人生の大事に対して自分は無知でしかないのだと自覚するのではなく、そんなことは先刻御承知だとばかりに、今にもその知識を確かに持ち続けている積りで、その知識を思惑して止まなかったのだと見られることでしょう。そしてすでに私たちが見て来たように、そのような「成り行き」に過ぎない行為と言えども半ばは目的な人生の不断のことでありそれ故にも言うべきかそれは許容されてこそ尤もな行為でありましたから、そもそも探すべき目的を失っているのだとその喪失に気づくことと気づかずに済ますこととの間にどれだけの得失と

相違があるのかという問題はなかなか論じ難いものがあるのだともされましょう。しかしながら、ソークラテースその人の事実に学ぶその限りでは、一方、告訴されたその法廷における弁明の最後では

・・・いやしかし、と言いますのも、今や去るべき時なのですから。この私にとっては、一方、死んで行くのだということ。他方、あなた方にとっては生きて行くだろうということ。だが、我々のどちらがより優れた事柄へと進んで行くのであるか、これは明らかではありません、誰一人にとってもです。一人、神にとってということを除いては。(42a)

というようにも言って成り行きのままの人生もまた立派な人生であり得ることを同じ人として確かに承認致します。だがしかし、他方、彼一身の人生の事柄としては、彼自身の存念はこういうところにあつたのでした。すなわち——

されば多分、人は言うことでしょうか。沈黙し静粛にしながらでは、ソークラテース、君は我々のために生きることは出来ないのだろうか、出て行った上ではと。このことこそ、実にすべてのことどもの中でも最も難しいことであるのです、あなた方の誰々を説得するのにです。何故なら、私が語って、神に対する不服従でそのことはあり、その故に不可能なのだ、静粛にすることはと言っても、あなた方は私に納得しては下さらないからです。空とぼけているのだと思つて。またもし更には私が語って最大の善きことでもあるか人間にとってこのことは。すなわち、毎日徳について諸々の言論を我が身に作ることに、またその他のことどもについてそうすることは、そしてそれらについて他ならぬあなた方は、この私が問答し私自身と他の人々とを吟味して行くところをお聞きになっておられる

のです。他方、吟味されざる人生は人間にとっては生きるべからざる生なのです、とこうするとしても、それらのことは、他方、なおより少なくてしかあなた方は納得なさらないのです、私が語っておりますのに対して。然るに、それらのことは先ずそのようにこそあるのです、この私の主張致しますように、だが説得することが容易ではないのです。(37e3-38a8)

すなわち、自らにはその智慧の喪失を自覚するとともに吟味されざる人生は人間の生にはあらずとして、他人にもまた智慧の喪失の気づきを求めました。だがそれも彼の言葉に拠れば彼の「魂の占いの力」に拠ったのでしよう。

後書きと註

これを読み上げて講義とするというこの文章の性質上、これが研究論文ならば如何にも要求されるであろう諸々の研究書や研究論文などへの言及は一切行われていない。筆者はこの書きものの書きものとしての筋書きがこの講義を聞いて下さる皆さんにとって先ずはそれとして平明に聞いて戴けるものになることを、何よりも第一ともしたからである。しかしながら、ただ一つ彼のアリストテレスがこの私が行為というものを追う追い方とは些か趣を異にするので、左にアリストテレスの言うところとそれについての私のさし当ってのコメントを記しておきたい。

然るに、それらのだとして限りがある諸々の行為のうちの何一つも目的ではなく、否、目的をめぐったことどもに属するのである。例えば、痩せさせること或いは痩せがそのことである。他方、まさしくそれらのことどもとしては、それらが痩せさせている場合には、そのようにして動においてあるのである。その際、それらは動がそれらのためであるものどもとしては土台その場所を占めてはいないのであって、あり得ないのだ、それらは行為或いは少なくとも完全な行為としては。(何故なら、それらは目的ではないから。) 否、そのものにとって目的が内在してある彼のものこそ行為でもあるのだ。例えば、人は見ていてまた見てしまっているものであり、思慮していて思慮してしまっているものであり、思惟していて思惟してしまっているものである。しかしながら、人は学んでいながらあっては学び終えてはいないのであり、健康にされつつあっては健康になってしまっていないのだ。人はよく生きてありまた同時によく生きてしまっているのだ。そして人は幸福でありつつまた幸福となり終えているのだ。だがしかし、もしもそうではないならば、何時か生きていることは止んでいたことだったろう、ちょうど人が痩せさせている場合に止むように。だがしかし、実際には止みはしないのであり、否、彼は生きていてかつ生きてしまっているものである。さあそこで、それらにあって一方のものどもは動(キネーシス)であると語り、他方のものどもは現実態(エネルギー)だと語らなくてはならないのである。何故なら、すべての動は非完結的であるから。瘦身化・学習・歩行・建築など。それらは、さあそこで動なのであり、またとにかく非完結的なのだ。何故なら、同時に歩いておって歩いてしまっ

いることはなく、建築中であっては建築完了ではなく、生まれつつあってはまだ生まれてしまっていないのであり、或いは動いてあっては動き終えてはいないのであり、否、異なっているのだ、動いてあることも動いてしまったことも。だがしかし、見えてしまいかつ見てあるのだ、同一のものが。それは思惟してもあり思惟してしまってもあるのである。先ずはされば、そうしたものを現実態だと私は語るのであり、他方、彼のものを動と語るのである。

先ずはされば、現実態にとって何がかつまたどのようなものがあるのかということは、それらからまたそのようなことどもから、我々にとっては明らかであるとせよ。

註釈家D・ロスが適切に整理しているように右の箇所も三つに区分され

A 第一段階では何処かで限りがあるのだというような行為はむしろ行為そのものではなく、何か中間的な過程である。行為とは目的が行為をしているその中に内在してあるものでなくてはならぬと、一つの区別をする。

B 第二段階ではそれぞれを例示し、行為をしていることが行為をし終えているとも言えるかそれとも言えないかということで見ると、見る・思慮する・思惟するは同時に見てしまっている・思慮してしまっている・思惟してしまっていると言えるが、他方、学習は学習してしまっているとは言えないことを告げる。

C そして第三段階では右の区別に基づき、一を現実態と呼び他を動と呼ぶのだとする自らの認識を語る。ということになっていることは、先ず明らかです。しかしながら、アリストテレスの行為に対するこのアプローチ

「ソークラテースとダイモーンの合図エピソード」をめぐって（水崎）

ではおよそ行為は固定的に目的内在的と目的非完結的との二つで分類されるのだということで見られてしまっていて、私たちのように「行為をしようとしている」とか行為の目的を内在化させようとする「意志」とかといったものは、背後に退いてしまつていられると言われるでしょう。アリストテレスは動は限りで限られるのだとか生きることはずでに目的の内在化した現実態なのだと言つて済ませています。余りもの静止的な思考ではないでしょうか。何故なら、私たちはむしろそもそも目的の内在化ということこそを、すなわち「探すこと」そのことの成立を問うのでしたから。

〔付言〕「自己自身の事柄を為す」というところで思慮の健全（ソープロシュネー）ということを問う問題的な彼のプラトーンの『カルミデース』篇の行為の分析はまた別種の斬新な切り口を示すものであろうが、他日を期したい。